三枚起請

笑福亭　松鶴

「源やん今日は。」
「喜いやんか。サア此所へ上り、その蒲團を觸つて見、未だ溫いやろがな。今までお前處のお母んが坐つて居たのや。お前の事を云ふて、甚う泣いてたで。チイと溫和しうせないかんで、そう年のいた者に心配さしなや。聞けばお前此頃夜泊り日泊りするさうやな。いかんで。」
「誰がそんな事を云ふてまんね。」
「お前處のお母んが來て云ふてたがな。」
「そら嘘だす。」

「そうか。兩方を聞いて見んと解らんもんやなア。お前そんな事を仕やへんのか。」
「ヘエ、夜は泊つて來ますけども、晝泊るといふ樣な事は仕た事がおまへん。」
「そら何を云ふのや。それが夜泊り日泊りと云ふ事や。しかし吾が家が有るのに、他所で泊ると云ふのは碌な事やない。またオイデ〳〵の逆樣てな事でも遣つてるのやないか。」
「ヘエ、オイデ〳〵と云ふたら　こうだんな。」
「そうや。」
「逆樣と云ふたら　だつか。」
「そんな仕惡い事をしいないな。そうやない。手の平へ三個の賽を乘せて、勝負と云ふ樣な事を仕てるのやないかと云ふのや。」
「源やん。お前の云ふてるのは、そら博奕やないか。」
「そうや、お前博奕を打つてるのか。」
「源やん、博奕やなんて、フワア……。」